

武蔵野日曜聖書講筈

パウロの信交の焦点

――エペソ書第1章――

1992年1月12日

小池辰雄

パウロの獄中書翰 聖徒とは贖われたる者 キリストが恵の主体 救は神さまの側に 無者とされている キリストに在って帰一 神の栄光の現れ 我々自身が神の栄光 信交は現実 天地渾然一つに包摂 即主の信 神の大能がキリストの中で働く 首と体 意気に感ずる

【エペソ1】

1 神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る。2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。3 讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、4 御前にて潔く瑕なからしめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に選び、5 御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。6 是その愛し給う者によりて我らに賜いたる恩恵の栄光に誉あらん為なり。7 我らは彼にありて恩恵の富に随い、その血によりて贖罪、すなわち罪の赦を得たり。8 神は我らに諸般の智慧と聡明とを与えてその恩恵を充しめ、9 御意の奥義を御意のままに示し給えり。10 即ち時満ちて経綸にしたがい、天に在るもの、地にあるものを悉くキリストに在りて一つに帰せしめ給う。これ自ら定め給いし所なり。11 我らは凡ての事を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業と為られたり。12 これ夙よりキリストに希望を置きし我らが神の栄光の誉とならん為なり。13 汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。14 これは我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。15 この故に我も汝らが主イエスに対する信仰と凡ての聖徒に対する愛とを聞きて、16 絶えず汝らのために感謝し、わが祈のうちに汝らを憶え、17 我らの主イエス・キリストの神、栄光の父、なんじらに智慧と黙示との霊を与えて、神を知らしめ、18 汝らの心の眼を明かにし、神の召にかかわる望と、聖徒に



ある神の嗣業の栄光の富と、19 神の全能の勢威の活動によりて信ずる我らに
対する能力の極めて大なることを知らしめ給わんことを願う。20 神はその大能
をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦えらせ、天の所にて己の
右に坐せしめ、21 もろもろの政治・権威・能力・支配、また啻に此の世のみ
ならず、来らんとする世にも称うる凡ての名の上に置き、22 万の物をその足
の下に服わせ、彼を万の物の上に首として教会に与え給えり。23 この教会は
彼の体にして、万の物をもて万の物に満たし給う者の満つる所なり。

●パウロの獄中書翰

今日から、パウロの獄中書翰に入ります。エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモンというわけですが、エペソ、ピリピ、コロサイ、どれを先に書いたか、そういうことは注解書に出てません。どうも、ピリピが一番後らしい。エペソは、あるいは初めかも知れませんが、これのバックは使徒行伝19章です。

パウロはロマ書でも言っているけれども、福音を宣べることと御業を行う事が、いつも平行している。そういうところが、彼の信仰がいかに観念でないか、ということ。そのパウロは、しかし、ガラテヤ書で

「信仰のみ」

ということを非常に強調している。

「本ものの信仰というものは、行為のことを言わなくても、同時に行為に発する」

ということを実をもつて彼は証明しているわけです。

「言うは易く、行は難し」

というのではない。

使徒行伝19章をちょっと開いてください。エペソの伝道でパウロはここに3年間いた。エペソは、また、ヨハネが長くいた所で、伝道の上で非常に大事な所です。交通の要衝でもあるし、文化的な中心でもあるし、アルテミスの祭られた偶像崇拜の盛んな所でもある。アルテミスというのは、「ルーナ」「月」の神さまでです。

エペソ書は、何年だということははっきりしませんが、大体、紀元60年前後。パウロが第2回伝道の時には、アクラ、プリスキラと非常に親しくなつて、パウロに支援した人です。第3回伝道が、エペソで3年間やつたという。

それから、もちろん、獄中書翰というのはローマです。ローマの獄中で書いた。獄中の人がこんな盛んな内容のことを語るかと。大変な霊止です。聖霊に満ちていると、逆境においては逆に強くなる。私は第1章を読んでいて、こんな事を言えるのはパウロの他にいないな、と思った。

「果たしてこれはパウロが書いたか」



なんていう学者がいますけれども、パウロの他に書けないですよ、こんなのは。いい意味におけるパウロ神学の構造が——もちろん、ロマ書は最大ですけれども——また、別な意味で非常に、エペソ、ピリピ、コロサイは天的な消息が、現実が強い。もう終りが近いことがあるせいかも知りませんけれども。読んでいて、説明なんかとてもできない。大事な内容を畳みかけて、本当にキリストに酔って書いていっているような人です。

●聖徒とは贖われたる者

「神の御意みこころによりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書ふみをエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る。

「私が」と言わないで、「パウロ」と名前を言っている。「聖徒」と言いながら、今度は、「キリストに在りて忠実なる者」と言っている。これを、よく、別な種類の人たちと思うのがかなり多いけれども、聖徒であり同時にそれは、

「キリストに在りて忠実なる者」

それが「聖徒」なんだと、これは同じ内容のことを別な言い方をしただけだと、私は思います。「聖徒」というのは要するに、

「贖われたる者、神の民とされた者」

ということ。それを、今度はこっち側から言うのと、「キリストに在りて忠実」でなければ、「聖徒」ではない。「聖徒」の実存は「キリストに在りて忠実」であること。

「使徒」というのは、これは特別です。パウロは、福音を特別に伝えるところの使命をも有ったものですから。「使徒」という言葉は、我々は使えないわけです。これは、

「直々にキリストから福音を受けてこれを伝える者」

という意味ですから。我々は「聖徒」であり、「聖徒」とされているんだ、もちろん。

「神の御意みこころによつて」とある。これは神の意思、正に「よつて」です。本願によつて、キリストの使徒、キリストに直に遣わされている者。大前提は神の意思です。「御意」という言葉をそう簡単には使えないです、本当に祈って御意と思わないと。運命的なものをいきなり御意なんて言えない。これは、ガラテヤ書でパウロがはつきり言っているように、

「人よりに非ず、人に由るにも非ず」

という。特に、パウロというのは特別な選り方をされたもので、実は御意に一番反した奴だね。ダマスコ途上でひっくり返された。それから今度は、本当に御意にこれ従わなければいられない人間になった。

キリストに本当に在れば、これは忠実ならざるを得ない。ここには正に、

「エン・キリスト」

「キリストに在りて」

と書いてある。キリストに在れば、心は忠実に忠実なる者にならざるを得ない。でなければ、



「キリストに在る」

ということが空言になってしまう。最初の挨拶の言葉は、挨拶といったって、非常に大事な内容です。

●キリストが恵の主体

2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恵^{めぐみ}と平安と

汝らに在らんことを。

パウロは、

「恵^{めぐみ}と信実^{まこと}」

とか、

「恵^{めぐみ}と平安」

というような言い方をしょっちゅうする。ギリシヤ語では「カリス」(恵^{めぐみ})という言葉と、「アイレネー」(平安)という言葉です。

「恵^{めぐみ}」という言葉だつて、内容は非常に深いわけで、キリストが実は恵みの主体です。キリストという恵みの主体と一つになっていけば、それが「平安」なんだ。だから、「恵^{めぐみ}と平安」なんて言ったって、本当の恵みの中にあれば、これが平安なんだ。

「言葉はいろいろ出てくるけれども、非常に内容的には連関して、同じ事を別な言い方をしている」

と言つてもいいくらいです。「恵^{めぐみ}と平安」と言うと、別な二つのものだと思つてはダメです。恵みを受ければ、それは同時に平安である。

福音の真理は完全に有機体的な構造になっている。「構造」という言葉がおかしいくらいですね。人間の身体が非常に有機体でしょ。分けるわけにいかない。全部、血がかよっている。そういうように、全部、血が通っているような構造になっているのが、福音の真理の構造ならざる構造なんだ。時計のような機械は一つの組織ですけれども、有機体はいわゆる組織ではない。生きたものは、ドラマティックでしかも有機体的である。人間が罪びとである限り、ドラマがどうしても生ずるんです。

天国は、もうドラマがなくなるね。天国というのは、ある意味では、面白くないかも知れない。ところが、また、天国は天国で、別な面白さがあるだろうと思います。それははずれ、私は書くかも知れませんが。

要するに、世界の歴史、個人の生涯がドラマであるということは、そこに光と闇が在るということなんです。そのドラマを解決したのが、今日も出てくるところの、この十字架なんだ。焦点です。



●救は神さまの側に

³ 讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに
由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処^{ところ}にて我らを祝し、

ここに、「天の処にて我らを祝し」とある。クリスチャンは、地にいます僕、キリスト者
我ら。地にいながら、この天地がまた離れていない。

⁴ 御前^{みまえ}にて潔く暇^{さす}なからしめん為に、世の創^{はじめ}の前^{さき}より我等をキリストの中に

選び、

大変なことだね。

「天地創造の前から、我らをキリストの中に選び」

という。

「随分これはそんな事を一体言っているのか、天地創造の前から選んだとは何事だ」
というくらいです。わからんです、これは。

⁵ 御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め
給えり。

大変な予定説だね、これは。ということは、質的にはこちら側の如何に係わらず、

「いや、俺みたいなの、キリストに逆らっていた奴を選ばれたとは一体どういうこと
か」

と。それをパウロは、ある意味において、こういう言い方をしたんではないかと思われる
ようなわけです。誰だつて考えて、こんなことを考えられないです、

「世の初めの先から選んだなんて、ウソじゃないか、それは」

と。こんな事を書くものだから、

「そんなキリスト教なんか信じてやるか」

なんてな事になってしまう。パウロがこんな事を言うものだから。

「あんまり独りよがりだ」

なんてね。「独りよがり」ではなくて、

「こちら側の如何に係わらず、もう神さまはそう決めてかかっている。それを時間
的に言うと、世の初めの先より、という表現しなくなってしまった」

と、こういうんでしょうね、おそらくパウロの気持は。

「キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり」

と。正にこれは特別な愛です。

「罪びとを己が子とする」

という、特別な愛です。

「愛するに値しない奴を愛する」

と、こういうわけだから。



6 はその愛^{いとく}しみ給う者によりて我らに賜いたる恩恵^{めぐみ}の栄光^{ほまれ}に誉あらん為なり。
「恩恵の栄光に誉あらん為なり」

なんて、随分ややつこしい言い方をしている。キリストの恵みそのものが、神の栄光ですから。それが賛美される為にである、と。

「恩恵の栄光に誉ある」

ということは、神さまのことですよ、こつちではない。そういう、

「恩恵の神の栄光に賛美があがるためである。救いは神さまの側にある」

と。こんなことを人間の頭で言えない。圧倒されているから、こういう言葉が出てくる。エペソ書のこんな言葉を読んでいると、

「何だか分げがわからないな」

ということになるでしょ、普通の頭で読んだら。正直、分げがわからないです。これは神・キリストに圧倒されているから、こういう言葉が次から次へと出てくる。

● 無者とされている

7 我らは彼にありて恩恵の富^{したか}に随い、

「恩恵の富に随い」というのは、この「富」というのは、恵みが凄いから、豊かな恵みと
いうことです。「恩恵の富」というのはね。豊かな恵みに従って、

その血によりて贖罪^{あがない}、すなわち罪の赦^{ゆるし}を得たり。

ここに出てくるのは十字架です。十字架の贖い。十字架が出てくる。これは恵みの中心で、
罪の赦しだ。「罪の赦し」というのは、我々の自我というやつが砕かれた。これが赦された。
「赦された」というのは、

「もう罪なきものにされた」

ということさ。ただ、「赦す」という言葉は、その点でちよつと間違ふと困るよ。神さまは、

「根底では、お前にはもう罪はないんだ。全部、完全に受けとってしまった」

と、これが十字架なんだ。だから、それで、私は「無者」という。無者とされているわけだ。

無者というのは、「罪なき者」ということ。

8 神は我らに諸般^{もろもろ}の智慧と聡明^{さとさき}とを与えてその恩恵^{めぐみ}を充^みしめ、

恵みの内容を豊かにするために智慧と聡明とを与える、と。「ソフィア」という字が使つて
ある。よくものを洞察することです。智慧と洞察の力とを与え、その恵みを充たしめ、

9 御意^{みこころ}の奥義^{みこころ}を御意のままに示し給えり。

「奥義」というのは「ミステリオン」という字で、「ミステリー」、人間のただの想像では出
てこないような、神さまの奥義です。仕方がない、奥義だから。「奥義」というのはいい言
葉だね。ここにも、「御意、御意」と書いてある。



●キリストに在って帰一

10 即ち時満ちて^{けいりん}経綸にしたがい、天に在るもの、地にあるものを悉とく^{ことごとく}キリストに在りて一つに帰せしめ給う。これ自ら定め給いし所なり。

「経綸」^{けいりん} 即ち「摂理」^{せつり}にしたがつて、

「天に在るもの、地にあるものを悉とくキリストに在りて一つに帰せしめ給う」と。この天地はキリストに在って帰一する。

「帰一する、一つに帰せしめる」

という訳はなかなかいいですね。

ギリシヤ語は、「アナケファライオーサスタイ」という、あまり他に出てこない言葉です。「包摂」^{ほうせつ}という意味です。全部包んでしまう。キリストが天地のものを全部、包み込んでしまう。パウロの信交の――私は「信仰」の字は「信交」と書いた、キリストの中に入っているんだから――その焦点はこの言葉にあるんです。この10節。これは第1章の中心です。

「天にあるもの、地にあるもの、天地をことごとくキリストに在って包摂する」

と。これがパウロの信交の焦点なんだ。「キリストロジー」「キリスト ロゴス」ですね、キリスト中心の信交です。何といつても、そうですね。キリスト抜きにして、「神」なんて言っていないんだ、パウロは。キリスト抜きにして、「聖霊」と言っているわけじゃない。キリストの霊だからね、聖霊というのは。もうじき出てきますけれども。「旧約の神霊」とは違う。

●神の栄光の現れ

11 我らは^{すべて}凡ての事を御意の思慮^{おもんばかり}のままに行いたもう者の御旨^{みむね}によりて^{あらか}預じめ定められ、

こんなことを言うものだから、「予定説」なんて言うんだな。カルビンが言いだした。

キリストに在りて神の産業と^せ為られたり。

パウロは、全くここにはよく

「エン・クリスト」(キリストの中に)

が出てきますが、神の働きのわざです。

12 ^{はや}これ夙よりキリストに^{のぞみ}希望を置きし我らが神の栄光の^{ほまれ}誉とならん為なり。

どこまでも、神の栄光の誉れとならんため。

「我々の存在は神の栄光の誉れとならんためである。キリストの聖名が上がる為である」

と。伝道は、もちろん人の救いですが、

「その救いは神の栄光の現れとなる」

というわけです。神の栄光の身証^{みしじょう}体となるということ。人を救う働きをする人も、救われる人も、どつちもそうです。要するに、栄光の現れなんだ、みんな。本当にキリストに在



って生きていること自身が栄光の現れです。だから、神を賛美する、讃美歌を歌うということは、自分たちが栄光の現れとなっている、光にされているということ。

「私たちは光の子だ」

ということとはそういうことだ。栄光の現れ、「ドクサ」です。

「汝らは世の光なり」

というのは、

「汝らは世におけるところの神の栄光なり」

ということ。ここに「希望」という言葉が出ているでしょ。ここにも「希望」と「愛」と「信仰」がちゃんと出ている。

●我々自身が神の栄光

13 汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。

キリストは約束して、それはペンテコステにやってきた。それが「約束の聖霊」。聖霊で印せられている。この印は解けない。魂の中に印せられている。

14 これは我々が受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ

神の栄光に誉あらん為なり。

「これは天界で受ける嗣業の保証である」

と。同じことをいろいろくどくど言っているわけだ。

「神の栄光、神の栄光」

と言っているね、パウロは。御霊に満ちて、力に満ちて、そして、いろんな事を言ったりしたりしている。

「これは全部、神の栄光の現れだ」

と思っているわけだ、パウロは。だから、「神の栄光」というのは、何か神さまがあつちの方で光っている、というのでなくて、

「我々自身が神の栄光だ」

ということ。花は太陽の栄光です。

「花は太陽の栄光の現れだ」

というわけだ。

「栄光の現れんためなり」

と。だから、一つになっている内容ですよ。バラバラではない。そうすると、1章のパウロの言葉が、何か面白くなってくる。面白いというか、身についてくる。

「なんかゴタゴタ書いてあるな」

では、いつまでたつてもゴタゴタしてしまう。



「偉そうなことを、難しいことを繰り返して書いてあって、なんだ面白くないな」と、普通、読めばそうですよ、おもしろくない。中身が、そういうように、我々の中に溶けてこなければ。

●信交は現実

要するに、「信交」のことは、全部、現実なんです。思われている世界ではない。現実にならなければ、本ものでない。私の藤井先生の時代は、「現実と理想」ということを、

「現実ではない、理想だ、理想だ」

と、しょっちゅう言っていた。あの頃はまだ、

「理想を追求しろ、現実^はは過ぎ行くものであるから」

なんてね。聖書の中にも、

「過ぎゆかん」

なんていう言葉もあるものだから。過ぎゆかないですよ、これは。年数的には過ぎゆくさ。けれども、質的には過ぎゆかないんです、現実^は。

そういう意味における現実主義者——「主義」という言葉は嫌いだけれども——現実を生きた人は、やっぱりゲエテなんです。なぜ、ゲエテが凄いかというと、本当の意味で、現実を生きた人です。「ゲエテ」なんていうと、すぐ、クリスチャンには躓きになるけれども、本当の世界は現実、キリストが我々にとって現在^にしている。

「キリストに在る」

ということは現実なんだ。その事^の中心になっているもの^は凄^いものは聖霊です。だから、

「普通の信仰ではどうにもならん」

と言っている。そのことを、私はこのあいだ、あの詩（「来たるべき十年」『エン・クリスト』45号1991年1月冬季号）でもって率直に書いた。

来るべき十年 —— ソネット —— （1990年宗教改革記念日作） 天海

一九九一年が明け始める。

今世紀はあと十年が残るのみ。

美しき天然のこの地球は

その存在を太陽に絶対依存している。

若し人類がこの美しき天然^{そこな}を害えば、

この美しき地球の保持を継ぎ得んや。

人類が地球の如く、神に決然回歸せずば、

人類は悲運に落ちる、光失せゆく大自然と共に。

どの社会もどの国も、そして誰しも

損得を問題にすべきではない。



問題は相たがい助け合うことにある。

どの人にもその人らしき使命がある。

愚生、五十年の聖書伝道の峠を越えたので、

今後は詩作十年の旅路を辿る。

無教会という歴史を私は持っているでしょ。そこで散々――まあ、迫害でもないけれども――除け者にされた。ところが、

「そんなことはないんだ」

というので、そういう意気込みで書くから、ああいう詩ができるんですよ。だから、敵を持つことは恵みなんだ。ルターも言ったよ、内村鑑三も言った。

内村先生も、もちろん、聖霊のことは語っていますよ。先生自身は、あれだけの魂ですから、文章は素晴らしいです。『キリスト信徒の慰め』なんてのは素晴らしい。最初に書いたんだ、あれは。今の若い人は、内村先生の文章を読めるか読めないかは知らんけれども、やっぱり読まなくてはいかん、あれは。古典的な文章だからね。

藤井先生になると、ちよつと落ちるね、そこは。もちろん、趣きのある文章ですけども。力に於てはやっぱり、内村先生だ。

●天地渾然一つに包摂

そこはまた、パウロとなると、またケタが違う。だから、パウロの手紙を読むと、躍動している。いわゆる神学構造ではない。有機体的な生命の文字だ。

「ああ、福音書は文字ではなかった、生命だった、生き物だった」

と、ナポレオンが言ったという。さすがは、ナポレオンはセントヘレナで最後に福音書を本当に読んだ。ナポレオンは天界へいったよ、あれは。ヒットラーなんてのは地獄だけど。マホメットも、やっぱりダンテは地獄へ持つていつてしまったな。だから、マホメット教の人たちはダンテの『神曲』を読まないだろうね。ご自分たちの宗教の親玉が地獄にいる、なんて。ダンテが生きていたら、やつつけられてしまう。

宗教の世界で剣を持ったら、おしまいだ。宗教戦争なんて大間違いだ。それぞれが、それぞれの啓示において本ものになればいい。

「神の栄光の現れんためなり」

と。神の栄光が天界に於ては神に、もちろん現れているし、地界に於ては、我々を通して神の栄光が現れている。

「それを渾然こんぜん一つにしているのがこのキリストだ」

と言っているわけです。それが包摂しているということ。要するにキリスト中心です。まあ、大変な霊止ひとです、イエス・キリストというのは。キリストがなかったら、どうにもならん。キリスト教ではないんだ。キリストの教訓おしえではない。教ではない、



「キリストそのもの」
だ。

●即主の信

¹⁵ この故に我も汝らが主イエスに対する信仰と凡ての聖徒に^{すべ}対する愛とを聞きて、¹⁶ 絶えず汝らのために感謝し、わが祈^{いのり}のうちに汝らをおぼえ、

「信仰と凡ての聖徒に対する愛」。キリストとの関係は

「信交」

信じ交わる。私は「信じ仰ぐ」とは書かない。「仰ぐ」と書くと、私はダメになってしまふ、キリストと一つにならなければどうにもならないから。「一つになる」といったって、一つに^いされて^いるんだ。

「お前がしょうがない野郎だから、私はとつ捕まえて離さないぞ」

というのが、これがキリストが私を愛している愛し方だ。

「まだ私の信仰と行為が本ものでないから」

と、そんな事を私は考えない。ダメなのは決まっているんだから。キリストにとつ捕まるから、それで、力が来る。無条件の本願の愛だから。

あなた方はそういう気合にならないですか。あなた方は私より立派だから、なかなか知らないかも知れない。私は「立派」なんていう言葉は大嫌いだ。人間の立派なんて高が知れているから。私は、乱暴にものを言いますがそれでもね、誤解しないでくださいよ。

「イエスに対する信仰」

と訳してあるでしょ。これもギリシヤ語ではやつぱり、「に^い対する」ではなくて「に^い於ける」です。

「ピステイン エン トー クリウー イエス」

「主イエスの中におけるところの信」

信交はキリストの中における信です。「に^い対する」という日本語では、分かれてしまふんだよな――それは「^い対する」という面もあるでしょうけれども――中^いに入^いって^いなければ^い即^いしているんだ。主に即する、即主。

「即主の信」

だ。中に入ってしまうと、今度は本当に私たちの中に入ってしまうと、これはもう聖霊の世界です。御霊のキリスト、キリストの御霊です。キリスト自身は天界だからね。

●神の全能がキリストの中で働く

¹⁷ 我らの主イエス・キリストの神、栄光の父、なんじらに智慧と黙示との霊^{のぞみ}を与えて、神を知らしめ、¹⁸ 汝らの心の眼を明かにし、神の召^{めし}にかかわる望と、



聖徒にある神の嗣業しぎようの栄光の富と、¹⁹ 神の大能の勢威いきおいの活動はたらきによりて信ずる我らに対する能力ちからの極めて大なるおおいことを知らしめ給わんことを願う。

まあ、畳みかけて書いてあるね。

「栄光だ、力だ」

と。非常にここには「栄光」という字が多い。エペソ書1章は「神の栄光の章」と言ってもいいくらいだ。

「能力ちからの極めて大なるおおい」

とはもちろん、聖霊の力です。大能の神だから、大能の神の力は、我々には聖霊を通してやってくる。オールマイティだよ、「大能」とは。

「彼の力のもの凄い大いさ」

というように言い方をしてる。そこで、「大能」と訳したんだね。「力」は「デユナメオース」。

²⁰ 神はその大能をキリストのうちに働かせて、

正にそうだね、福音書は神の大能がキリストの中で働いている。それから今度は、神の大能は、十字架にかかったキリストに働いて、

之を死人の中より甦えらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、

「己の右に」なんていう、こういう言い方は全く地的な言い方だ。どれが右だか左だか訳けがわからない。「右」というのは、「右大臣、左大臣」のように、力の象徴なんだ。

民主主義の世の中でも、「大臣」なんて言っているんだから、今はちよつと、おかしいね、あの「大臣」という言い方は。「大蔵大臣」なんて。本当に「臣下」ならば、天皇に力がなければダメだ。今の天皇には力がないものな。言葉というものは歴史の変遷で、意味を失ったり、いろんな事になるんだね。

「キリストが甦る」ということは、この罪なき人が罪の贖いをした。そうしたら、これはまた、霊的な存在として現れざるを得ない。

「太陽が西に沈んで、東にまた出て来ざるを得ない。太陽は見えなくなったらけれど、も、また出てくる。それと同じことだ」

と詩にも書いたでしょ。ゲーテが、別のところで、似たようなことを言っているよ、「沈むのはまた現れるためである」と。

●首と体

²¹ もろもろの政治・権威・能力・支配、またただ啻に此の世のみならず、来らんとする世にも称うる凡ての名の上に置き、

キリストをね。

²² 万の物をその足の下に服したがわせ、彼を万の物の上に首かしらとして教会に与え給えり。



「教会」「エクレシア」は体^{からだ}。神に呼ばれた者、我々はキリストの身体^{からだ}。キリストは我々の頭というわけだ。正に有機体的構造です。頭からすべての指令が身体に発する。私は左の手を挙げようとすると、これは頭の命令で来ている。勝手に挙がっているのではない。そのように、

「キリストの頭でもって本当に動いているか。そうでなくて、勝手に動いているではないか。それで、ただ御意なんて言っているのではないか」

と言われているんだ、ヘタすると。

ブルンナーが『教会の誤解』（『ミスフェアシュテントニス デア キルヘ』）という本で、

「本当に聖霊が中心になって動いてなかったら、教会はダメだよ」と言っている。あのブルンナーの本は大事な本です。

あれを訳したS君が――私の昔の藤井先生時代の友だちだ――訳しながら、本当の聖霊の世界に入らない。とうとう終いには、脳血栓で仆れてしまった。T書店さんも同じような病気に罹ってしまった。気の毒でね。

本当に平伏して、キリストと一つになりなさいよ。そうしたら恐いものはないから。

「いろんな政治・権威・能力・支配、天に在るものも地にあるものも、そんなものはみなキリストの下である」と。

²³この教会は彼の体^{からだ}にして、万^{よろず}の物をもて万の物に満たし給う者の満つる所なり。

「アッレス イン アッレム」（オール イン オール）

というやつ。一切が満ちてしまう。その満ちる中心は正にキリストである。キリストは万物を貫き、いたる所に遍在^{へんざい}し、いたる所に内在する。

自然と人間とは一つなんだ、自然の上でも。大自然を害^{そこな}ったら、実は自分の身体を害っていることと同じことなんです。そのことに大分気が付きだして、一生懸命でやっているんだけれども、ちよつともう遅いね。

●意気に感ずる

原子爆弾みたいなものは、全部、宇宙に投げ捨てたらいいんだけど、投げ棄てられないだろうな、宇宙に。地球に置いたって、どこに置いても害をなすからね。爆発しようものならば大変だ。アメリカとソ連が悪い物を一生懸命で造ってしまった。軍備のためにもの凄くやったものだから、ソ連は経済的に参ってしまった。

日本はアメリカのお蔭で経済的にどんどん成長して、「経済大国」になったなんて言っちゃって、もともとアメリカさんのお蔭でやっているだけのはなしだ。余り大きな顔できない。だから、アメリカに「譲歩しろ」と言われる。少し損してもいいから、譲歩したらいいんだよ。すべて、



「意気に感ずる」

ということ。そして、向こうもまた、いい事をしてくれる。何でも計算づくで、プラスにならないければやらない、というような事をやっていたら、いつまでたってもダメですよ、マイナスを引き受けなければ。

「人生、意気に感ずる。功名何ぞ望まん」

という。その通りだ。少年、青年の教育をできる先生方がいないから、困ってしまった。しょうがない。あなた方はどなたでもが、本当の意味で社会に、先生になってくれなければ。恐れなく言いなさいよ。聖霊の世界に入ったら、もう恐れはないからね。はつきり、ものを言ったらいいですよ。はつきりものを言って、はつきりものごとをする。本当の権威があるから、何か知らないけれども、向こうが「そうか」と、魂の世界は、本ものには感じますからね。頭でひねくつた事なんか、ひとは感じない。

「万よろずの物をもて万の物に満たし給う者の満つる所なり」

と。一切のものに「神・キリスト・聖霊」の、要するに、

「三位一体の神が自在にその栄光を現している」

ということなんだ、第1章は。

「その栄光の現れる一番大事なのは我々自身だ。他のことではないよ」

ということなんです。

それで、第1章の気持ちがおさまりましたかな。読んでいてね、

「何かゴタゴタしている」

と。何もゴタゴタしない。全部、実は、連関した言葉を、パウロは讃美歌みたいに言っているんだよな。

「お前みたいに話するのは、大いに嬉しいよ」

と、パウロが言っているでしょう。勿体ぶつたような話し方をしないんだ、こっちは。教会の牧師さんたちは、勿体ぶつて話しているからね。いわゆる

「学者・パリサイ人びい」

にはならない。

いいですね。そういう気合で読んでいってくださいよ。そうすると、私も、昨日の晩、そういう気合で読んでいたら、やめられなくなつて、6章の終りまで読んでしまった。楽しいよ。では、おしまいにします。

